
ブルマーの追憶 ~ おもらしからはじまる恋愛小説 ~

山下沙織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブルマーの追憶 ～おもろしからはじまる恋愛小説～

【Nコード】

N1047Z

【作者名】

山下沙織

【あらすじ】

給食のあと保健室で吐いてしまった幼なじみの涼。彼を介抱するとき、沙織は涼の吐いたもので制服を汚してしまう。

制服を洗うため体育着ブルマーに着替えながら、恥ずかしさの混じった違和感を感じる沙織。そのまま教室へ戻ると周囲から好奇の視線にさらされ、ますますその思いを強くする。

沙織はその状況を、昔幼稚園のときおもろししてしまって自分だけ

ブルマーを穿かされていたときの情景と重ねあわせる。でもそのとき同じクラスにいたはずの涼の姿が思い出せない。不安に苛まれながら次第に尿意を高めていき、幼稚園のときのようにおもらししてしまう沙織。

ふたたび保健室へ戻った沙織を見た涼は？

学園を舞台に、過去と現在の間で気持ちを交錯させながら、おもらししてしまったことが彼との距離を縮めていく、恋のファンタジーを表現しました。

不思議な罪悪感（1）

それは保健委員だから、という理由だけではなかった。そして、それがすべてののはじまりだった。

給食後に急に吐き気を催した涼を、沙織は支えながら保健室へ歩いていった。幼稚園の時の同級生でしばらく離れ離れになっていたがこの学園に入って再会したふたり。優しく、快活なしゃべりでも沙織を笑わせていた涼が、いまは顔を青くして黙っている、その異変に、沙織は黙って見ていることができなかった。

保健室までは我慢した涼だったが、保健室の暖かい空気に包まれた途端、安心したのか急にこみ上げて立ち止まった。口もとを手で押さえてうつむいた涼を支えようと、沙織が思わず身を乗り出した瞬間、涼の手の隙間からさつき食べたばかりの給食が少しあふれ出てきた。それは夏服になったばかりの沙織のブラウスとスカートを汚した。

保健室の先生がキャスター付きの洗面器を持ってきて涼の前に置くと、やさしくそして強く、涼の背中をさすった。

「涼くん気持ち悪かったのね、もう大丈夫だから・・・、ゲエしてごらん。はい、ゲエ」

先生のやさしい言葉に促されるように、涼はしばらくうつむきながらだんだん下あごをしどけなく開かせると、洗面器の中にたくさん嘔吐した。沙織は涼の肩を黙って支え続けた。口もとを汚しながら、沙織の目の前でさつき食べたばかりの給食を、気持ちよさそうに戻していく涼を見て、沙織も思わずこみ上げそうになったが、そこは

なんとか我慢した。

不思議な罪悪感（2）

「沙織さん、制服が汚れちゃったわね」

「いえ・・・」

「制服洗ってあげる。いま教室から体育着持ってきてもらってから、乾くまでそれ着ててね」

保健室を出て沙織の教室へ赴いた先生は、担任の女性教師に耳打ちした。そして彼女が副委員長の女子を呼んで言った。

「沙織の体育着を先生に渡してあげてくれる？」

女子は少し驚いて保健室の先生に聞いた。

「沙織、どうかしたんですか？」

「ううん、なんでもないの。先生が預かるから、お願いね」

先生はそう言って、沙織の体育着を受け取り、保健室へと戻っていた。先生がはぐらかしたのは涼が吐いたことを黙っていたからだが、それがかえって教室の中を少しざわつかせた。

不思議な罪悪感（3）

「沙織、汚しちゃってごめんね」

吐いてだいぶすつきりした涼だったが、自分のせいで沙織の制服を汚してしまったこと、そして何より沙織の目の前で吐いてしまったことに落ち込んでいた。先生は念のため保健室のベッドでしばらく休ませることにした。涼はおそらく4時間目の体育で激しい運動をしたあとの給食だったので、胃が食べ物をつまく受け付けなかったのかもしれない。

優しく涼に目配せする沙織を、保健の先生はそつとベッドの隣の部屋に連れていき、いま持ってきた沙織の体育着を渡すと

「脱いだものは、このカゴに入れてね」

と言ってカーテンをさつと閉めた。

カーテンを1枚隔てたすぐ向こう側で涼の気配を感じながら、沙織はなるべく音を立てないように制服を脱いだ。そして先生が持ってきてくれたエンジのブルマーと袖に同色のラインの入った体育シャツに着替えながら、沙織は自分が悪いことをしたわけではないのに、不思議な罪悪感を感じていた。

《なんだろう、こんな気持ち、前にもあったような・・・》

沙織は脱いだ制服の入ったカゴを先生に渡した。先生は

「じゃあ洗濯して干しておくわね。薄いからたぶん放課後には乾い

てると思う。先生はこれからちょっと留守にするけど、あとでこいで着替えていってね」

と言つて沙織を見送つた。

沙織は教室へと歩いていった。すでに午後の授業が始まつていて、さっきまでざわついていた校内がすっかり静まり返つていた。体育の授業でもないのに、ブルマーのまま校内を歩くことに、沙織は恥ずかしさの混じつた違和感を感じはじめていた。渡り廊下を吹き抜ける風が、沙織の太ももをくすぐつた。校舎から垣間見える山の燃え立つ緑がまぶしかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1047z/>

ブルマーの追憶 ~おもしろからはじまる恋愛小説~

2011年12月3日22時49分発行